■ 特集 2　2012 年度先端社会研究所定期研究会 ■

「南アジア／インド班」第 3 回研究会講演録

南アジア系音楽家のクラブミュージックにおける〈南アジア性〉と〈アンダーグラウンド性〉の変化

サラーム海上
（よろずエキゾ風物ライター／DJ）

○司会　では時間になりましたので、研究会を始めることにいたします。

本日の講師、サラーム海上さんについて、最初にご紹介します。いきなり私ごとで恐縮ですが、そもそも私自身はインドやアジアの研究を専門にしているのではなく、レゲエやカリブ海発の音楽について研究をしています。でもそれと並行して、世界中の「ワールドミュージック」と呼ばれる音楽にも興味を持ってきました。そして、1990 年代あたりからワールドミュージック関連の音楽評論でめきめきと頭角を現してきたのがサラーム海上さんだったのです。当時からいろんな媒体で、例えば一般的なところでは、テレビの情報誌に『テレビブロス』というものがありますが、あの雑誌などでアルバムレビューやインタビュー記事を永らく執筆されています。そのころから私はサラームさんの先鋭的な文章が気になっていて、ある意味で日本語による音楽評論において独自の文体を確立させた一人というふうに言っても、大げさではないと思います。本日の研究会は、先端社会研究所の「南アジア／インド班」という研究班が主催しておりますが、私自身はこの班に加わった最初のころから、これはサラーム海上さんを呼べるかもしれない、呼んでみたい、と思っておりまして、その思いがきょうこの場で実現するということで、非常にエキサイティングな気持ちになっております。

サラームさんはこれまでに何冊も本をお書きになっていて、現在一番新しいものがこちら、『21 世紀中東音楽ジャーナル』……。

○サラーム　中東です。

○司会　『21 世紀中東音楽ジャーナル』。本日あちらに何冊かご用意しておりますので、もしご興味があればお手にとってみてください。

それではサラーム海上さんに、南アジア系音楽家のクラブミュージックにおける南アジア性とアンダーグラウンド性の変化というテーマでお話をしていただきます。

かなり盛りだくさんにお話をご用意してきてくださったとのことですので、サラームさんにはまず 100 分間ぐらいお話をしていただくことにします。その後で質疑応答の時間を設けます。皆様のお手元に質問用の紙をご用意しておりますので、ご質問等をそちらにお書きいただいたうえでご提出ください。それでは、サラーム海上さん、よろしくお願いいたします。

○サラーム　わかりました。こんにちは、サラーム海上と申します。東京から来ました。ちょうど

今週は NHK の FM で四週間に一週、月曜から木曜まで、朝 9 時 20 分から 10 時まで、「音楽遊覧飛行エイジアンクルーズ」というアジアの専門の音楽番組をやっています。音楽雑誌やテレビ雑誌などに文章を書いたり、新宿の朝日カルチャーセンターでワールドミュージックの通年講座をやり、週末になるとクラブで DJ をしたり、やれることは何でもやっている人間です。よろしくお願いします。きょうはたくさんの方、来ていただきましてありがとうございます。

今日のお題「南アジア系音楽家のクラブミュージックにおける南アジア性とアンダーグラウンド性の変化」、すごく長くてわかりにくいと思うので、一言で言うと「エイジアン・アンダーグラウンド」と言われる音楽の話をします。エイジアン・アンダーグラウンドとはどういう音楽かというと、僕が 2006 年の暮れに出した『プラネットインディア　インドエキゾ音楽紀行（河出書房新社)』という本の中でもエイジアン・アンダーグラウンドについて 1 章を割いてます。エイジアン・アンダーグラウンドという言い方はイギリスの言い方で、アメリカだとエイジアン・マッシブという言い方をします。イギリスやアメリカなどの欧米諸国に住むインド系、パキスタン系、（インド系の人たちのことは NRI、ノン・レジデンシャル・インディアンといいます)、いわゆる南アジア系の音楽家が中心となった南アジアの伝統音楽と現代の音楽と欧米のポップミュージック、ロックやテクノやヒップホップなどがミックスした音楽のことです。

インドでは一般に聞かれている音楽の 90％ 以上が映画の音楽です。映画の主題歌や映画の中の挿入歌でダンスするシーンで流れる音楽、それらは最初から、売れるために作られる、大衆の受けを狙った音楽です。エイジアン・アンダーグラウンドは、イギリスやアメリカで生まれたインド系の子供が、インド本国のそうした大衆音楽のニーズにこびることなく、自分たちの感覚を通じて自分の音楽をつくるというムーブメントのことです。

これは 1980 年代頭から今に至るまで続いているムーブメントです。なぜインドやパキスタン本国ではなく、欧米発信なのかというのは、僕たち日本人や欧米人は、現在のインターネットの時代になるまで、インドという国の中で人々に聞かれている音楽をリアルタイムで聞くことはできなかったからです。インド人の音楽家が欧米や日本に入ってくるには、例えばビートルズやローリング・ストーンズを介さなければならなかった。YouTube の時代になって初めて、インドで先週どんな CD がリリースされて、今、どんな曲がヒットしているか知ることが出来るようになりました。今では、僕たちはインド人とまるっきり同じように、昨日リリースされたものでも聞くことができます。ただ、こうしたことが出来るようになって、まだ 5 年ぐらいしかたっていません。インドでのブロードバンドの普及以降のことです。だから、エイジアン・アンダーグラウンドは、インド亜大陸の外側から見たインドの音楽、外国人が勝手につくり上げた理想のインドの音楽と言いかえることができると思います。

なぜこんな話をするかというと、そのエイジアン・アンダーグラウンドこそ僕が最も身近に感じられたインド音楽だったからです。僕は 1967 年生まれです。僕の音楽体験を話すと、1979 年にイエロー・マジック・オーケストラが出てきて、80 年になるとイギリスなどのパンクやニューウエーブという音楽が自分の心に響くようになりました。1979 年から 80 年ぐらいにかけて初めて、物心がついて音楽を聴き始めたんです。僕が初めてインド音楽を聞いたのはそのちょっと後の 1982 年です。そのインド音楽はインドから来た音楽ではなく、イギリスから来たインド音楽でした。だ

から最初から僕はエイジアン・アンダーグラウンドを聞いていたということになります。だから自分にとって思い入れがあるものなのでしょう。そして今年は 2012 年なので、ちょうど 30 年前です。30 年前からこんな音楽を飽きずに聞いていたんだなと自分でも感心しますよ。そんなわけで、今日は 1982 年から 2012 年までの 30 年間に登場した音楽の話をします。

ここで皆さんに質問です。初めて聞いたインド音楽が何だったか、覚えている方は手を上げて下さい。一番前の方。

○参加者　パンジャビ MC（イギリスで 1990 年代初頭から活動するパンジャーブ民謡バングラの歌手。バングラにヒップホップをミックスし、2003 年には「Mundian Bach Ke」が欧米でも大ヒットした。詳しくは後述）

ということは 2003 年ですね。もう 1 人、前から 3 番目の女性は？

○参加者　インド音楽じゃないかもしれないですけど、ジョージ・ハリスン（元ビートルズのメンバー、インド文化に出会い、ラヴィ・シャンカルにシタールを師事した）です。

そうですよね。ビートルズのジョージ・ハリスン。ビートルズはインド音楽じゃありませんが、「ノルウェイの森」ではシタールが使われていたり、「Within You Without You」ではインド人演奏家とともに演奏しています。ローリング・ストーンズの「黒くぬれ」にもシタールが使われていました。次は一番前の方。

○参加者　ラヴィ・シャンカル。

1960 年代末のヒッピー文化真っ盛りの頃に、インドのシタールという楽器を世界に広めた人です。ちょうど去年の 12 月暮れに 92 歳で亡くなりました。ビートルズ、ラヴィ・シャンカル、そしてパンジャビ MC の名前が出ましたが、日本人が初めて出会うインド音楽はやはり世代ごとに異なりますね。

次に初めて生で聞いたインド音楽を覚えている方、挙手下さい。同じ女性の方。

○参加者　私はラヴィ・シャンカル。

それはインドで聴かれたのですか？

○参加者　ロンドンです。

ロンドンで見たラヴィ・シャンカル。ほかは。男性の方。

○参加者　コーナーショップ。

それは去年のフジロックフェスティバルでしょうか？

○参加者　いや、初来日時です。

コーナーショップは 90 年代にイギリスで活動したロックバンドです。中心人物がインド系の移民で、イギリスのロックに少しだけインド音楽を足したような音楽性です。もう 20 年も続けている人たちです。

このようにインド音楽は常にイギリスの音楽とつながって紹介されていたんです。最初に名前が出たパンジャビ MC もイギリスでヒップホップとバングラをやっていた人です。インド音楽がイギリスを介さずに、インドからダイレクトに日本に入ってくるようになったのは、現在の YouTube 以降の時代が来て初めて可能になったんです。

エイジアン・アンダーグラウンド――1980 年代前半

さて、今日は映像もたっぷり持ってきたので、それらを見てもらいながらいきましょう。

僕が最初に聞いたインド的な音楽はやはりビートルズだと言いましたが、正確にはビートルズはインド音楽ではないので、エイジアン・アンダーグラウンドの最初のものと思われるものからお聴かせします。1982 年のイギリスのニューウエイブバンドでモンスーン（Monsoon）。

《映像・音響資料：Monsoon「Ever So Lonely」1982 年》

ラクダが出てきたり、インド人ではなく、アラブ人の格好をしていたり、いいかげんだなあと思いませんか？　モンスーンは、インド系移民二世のシーラ・チャンドラという当時 16 歳の女の子がイギリス人のプロデューサーと一緒に結成しました。この曲はヒンディー語で歌っているバージョンもありますが、今は英語で歌っているほうをお聴きいただきました。1982 年の頃は、12 インチシングルというメディアが登場したばかりでした。LP サイズのシングル盤です。DJ がかけるためには 7 インチ盤よりも 12 インチ盤のほうが大きくて扱いやすいし、収録時間も長く取れた。そこで 1980 年代に大流行したんです。モンスーンも、この曲を 12 インチシングル盤でリリースしたところ、イギリスのディスコやクラブでヒットしてしまった。そのおかげで、日本でも発売されました。

歌は英語ですが、彼女はインド古典声楽を学んでいたため、ある程度はインド音楽になっています。これが僕が最初に聴いたインド音楽だったんです。でも、インド音楽であると同時に、当時の 80 年代初頭のロックっぽい音、例えばデュラン・デュランなどに通じる音になっている。ロックとインドの音楽が同じ次元で入っているのが、当時、高校 1 年だった僕にはすごく新鮮に思えて、それ以来、僕はこういう音楽を掘るようになりました。

ちなみに 1982 年にインド本国ではどんな音楽が流行っていたのか。それは日本にはダイレクトには入って来ていませんでした。神戸や吉祥寺あたりのインド雑貨店に行けばカセットテープが売

られていたかもしれませんが、そのカセットがその前週に発売された最新のものか、数年前のものか、誰も判別しようがなかった。そんな時代です。では、1982 年インドで大流行していた曲を聞いてもらいます。

《映像・音響資料：Bappi Lahiri, Parvati Khan「Jimmy Jimmy Jimmy Aaja」1982 年》

これは 1982 年のボリウッド映画、ヒンディー語の映画『ディスコダンサー』の挿入曲です。この映画を当時インドで見た日本人は多少いただろうけれど、カセットやレコードを持って帰って、日本で面白がって聴いていた人はほとんどいなかっただろうと思います。当時は海外からこの曲に直接アクセスする方法はなかったのです。アクセスできたインド音楽はラヴィ・シャンカルのような古典音楽か、もしくはさっきのモンスーンのようなイギリス経由で回ってきた音楽しかなかった。でも、この曲は 2007 年にイギリス在住のスリランカ系の女性ラッパー、M. I. A がカバーして世界的に大ヒットしました。こちらは日本でもラジオなどで随分流れたので、聞いたことある人も多いでしょう。

《映像・音響資料：M. I. A「Jimmy」2007 年》

1982 年という時代に戻ります。その頃までは欧米の白人が作るロックや、同じく欧米の黒人が作るリズム・アンド・ブルースやソウルなど、作る人種がはっきりした音楽しか日本にまでは届かなかった。それが、ちょうどその頃から変わり始めました。70 年代末のパンク・ロックというムーブメント以降、欧米のレコード会社からリリースされてさえいれば、インド系移民や中東移民、東欧移民の音楽さえ日本まで届くようになった。楽器を持って 3 カ月練習しました。コードは 2 つしか押さえられません。そういう人たちでも、やる気さえあれば自分で小さなレーベルを作って、自費でレコードをプレスして、売るということが可能になったのがその時代でした。そうしたレーベルのことをインディペンデント・レーベルといって、彼らミュージシャンのことをインディペンデント・ミュージシャンといいます。それを省略して今では「インディーズ」と呼びます。それまでは大きなレコード会社しかなかったので、レコード会社の人が発掘して、会社ぐるみでバックアップするほどの才能のある人しかレコードを出せなかった。でも、パンク・ロック以降は、そうじゃない人まで自分でレコードを出せるようになった。そこでイギリスに住んでいた移民たち、例えばガーナやナイジェリア移民（彼らは 20 世紀の初頭からイギリスで自分たち向けのレコードを作っていましたが）、そして、70 年代後半になるとジャマイカ移民がたくさんレゲエのレコードを作りました。東ヨーロッパからの移民、そこにはユダヤ人やロマも含まれていましたが、そういう人たちがジャマイカ移民と一緒に演奏した時に「2 トーン・スカ」いう音楽が生まれました。

インド系移民たちも自分たちのレーベルをつくって、自分たちの音楽を作り始めました。ただ、彼らはナイジェリアやジャマイカ移民と違い、英語で歌わなかったため、コミュニティー内部だけで聴かれることになり、長い間、国際的にはならなかった。例えばパンジャービー語で歌っていたので、一般のイギリス人や他の移民たちが彼らの音楽を聞くようにはならなかった。ジャマイカ移民はパトワという英語のジャマイカ方言で歌い、ナイジェリア移民も英語の歌をたくさん作ったので、インド移民の音楽よりもいち早く世界に広まりました。ところで、インディペンデントという言葉から派生したインディーズという言葉がまったくの偶然ですが、インドの複数形と同じ響きなのが不思議です。意味のない偶然でしょうけど。

そうやってイギリスで成長したインド系音楽の 1 つにバングラというのがあります。それは前回の講座に登壇された、東京大学大学院人文社会科系研究科博士課程、栗田知宏さんが話されたので、僕は軽く触れるだけにします。（栗田知宏氏の講演録については先端社会研究所紀要第 12 号〈特集 3〉を参照されたい）

エイジアン・アンダーグラウンド――1980 年代後半

次は 1980 年代後半です。その頃、世界的にワールド・ミュージックというジャンルがブームになり、アフリカの音楽が注目を集めました。一人はセネガル人のユッスー・ンドゥール。彼はセネガルの文化大臣にまでなった、アフリカを代表する音楽大使のような方です。ほかには、マリのサリフ・ケイタ、彼は坂本龍一と一緒に演奏されたりもしています。英語圏の国だとナイジェリアのフェラ・クティがアフロビートという音楽を作りました。アフロビートは世界で最も強力なダンス音楽として評価をされています。

アフリカの音楽以外に、日本で一番流行したワールド・ミュージックとしてはフランスのジプシー・キングスが挙げられます。1994 年には彼らの曲が『鬼平犯科帳』という時代劇のエンディングテーマに使われて、40 万枚以上 CD が売れました。

1980 年代末、ワールド・ミュージックが世界的に流行した。それまで世界的にはまったく聞かれていなかったアフリカ音楽、インド音楽、アラブ音楽がなぜ突然注目されるようになったのか。その理由の 1 つは趣味が多様化したこと。僕のように生まれながらに中東の音楽が好き、なぜだかわかんないけどインドの音楽が好き。インディーズの動き以降、そういう人たちが自分の音を発表し、聞き手もそうした音を受け入れる素地が出来た。

そしてもう 1 つの理由は安価な電子楽器が普及することによって、バンドのメンバーが揃わなくとも音楽を作れるようになったこと。機材と音楽家一人がいれば、ナイジェリアに行かなくとも、ロンドンやパリや東京で音楽を作ることが出来る。楽器が演奏出来ずに、それまで音楽を作れなかった人も、自分だけの音楽を作れるようになった。その結果、音楽 CD のリリースされる数量も激増しました。

次に紹介するのは、80 年代末のイギリスの工業都市、バーミンガムから登場して、ファッションショーの音楽に用いられ、しまいには日本の銀行の CM にも出てしまったインド系の女性歌手ナジマ（Najma）です。

《映像・音響資料：Najma「Dil Laga Ya Tha」1987 年》

ナジマはガザルと言われる軽古典音楽、中世のペルシャ起源の定型詩を元にした声楽を元にしています。ただ、今、聞いてもらったとおり、この作品は非常にジャズっぽいアレンジがされてます。これは当時非常に新鮮に聞こえて、おかげで欧米のファッションショーで使われたり、日本の銀行のテレビ CM にまで出るほどの人気が出ました。

ここでエイジアン・アンダーグラウンドを 4 つのタイプ別に分類します。

今のナジマはタイプ 1 のインド古典音楽を用いた新しい音楽です。彼女はインド古典音楽を学んでいただけでなく、イギリスに住んでいたため、イギリス人のジャズのベーシストと組んで、イン

ド本国には当時まだ存在していなかったインド古典フュージョンを作ることが出来ました。ジャズやロックなど欧米の音楽とインド古典音楽を混ぜ合わせることで、自分だけの音楽性を出すのがタイプ 1。最初にお見せしたモンスーンも同じタイプです。

イギリスに住んでいる南アジア移民は経済的にも社会的にも弱者であることが多いです。そのためエイジアン・アンダーグラウンドの 2 つ目のタイプは人種差別や経済格差など、社会的なメッセージを歌うヒップホップ的な音楽。

エイジアン・アンダーグラウンドの 3 つ目は、そうした南アジアの移民コミュニティー内部に向けた音楽。1980 年代後半のイギリスではパンジャービー語で歌われるバングラという音楽がコミュニティーの中で人気となり、冠婚葬祭、結婚式などになくてはならない音楽となりました。パンジャビ MC はコミュニティー内部だけでなく、世界的なヒット曲を出しましたが、通常バングラはコミュニティー内部だけで聞かれ、パンジャービー語を解さない外部の人間にはアクセスはまだまだ難しいです。

エイジアン・アンダーグラウンド 4 つ目の音楽は、インド音楽の要素をあえて使わずに欧米音楽の土俵で勝負する音楽家。この 4 つのタイプに分けることができると思います。

エイジアン・アンダーグラウンド――1990 年代

今度はタイプ 2 の音楽から一つ紹介します。社会的なメッセージを歌う音楽です。90 年代に入る頃、欧米や日本では大衆に好まれるサウンドの方向性が 180 度変わりました。それまでの 80 年代の音楽というのは広いスタジオ、例えばカリブ海とかにある豪華なスタジオにバンド全員で行って、そこで一流のセッション・ミュージシャンと最新の機材を使って、予算をかけて贅沢に作ったサウンドが好まれました。しかし、90 年代に入ると、もっと地に足の着いた感じの音、もっとアノニマスな音の響きが好まれるようになりました。ファッションでも、デザイナーズブランドからストリートブランドに変わったのは 80 年代から 90 年代です。それとシンクロしているのでしょうが、ヒップホップやレゲエ、ハウス・ミュージックと言われる、電子機材を使った単調な繰り返しを基本とした音楽が注目されるようになります。日本でレゲエが流行りだしたのは 90 年代初頭です。日本語のラップが一般的になったのも 90 年代中頃になってからです。

本来、一流のミュージシャンが表情豊かに演奏した音楽のほうが気持ちいいはずですけど、人間の感覚というのは時代とともに移りゆくものなので、表情のない単調な音楽のほうが心地良く聞こえることもあるのです。90 年代にはそういう音が好まれるようになりました。

1980 年代にはクラブやディスコは入り口で服装チェックなどがあり、着飾って行かないと入れなかったけれど、90 年代になるとスニーカーや短パンの姿で入れるようになった覚えがあります。それと同じで、これまで紹介した、例えばナジマはドレスアップして聴く音楽でしたが、ここからはちょっとドレスダウンした美学を持つ音楽が中心になります。

タイプ 2 の音楽家でファンダメンタル（Fun-Da-Mental）。イギリス生まれのパキスタン系のプロデューサーが中心となり、人種差別問題、経済格差問題をラップに乗せて、出てきた当時はエイジアン系ビースティー・ボーイズと言われました。

《映像・音響資料：Fun-Da-Mental「Dog Tribe」1994 年》

暴力的なシーンが続くビデオですね。ファンダメンタルというグループ名は原理、原則、原理主義を意味するファンダメンタルという言葉と、喜びのファン、精神のメンタルをもじっています。ビデオの中で殴られていた長髪の男性が中心人物のアキ・ナワーズで、彼は敬けんなイスラーム教徒でもあります。この曲のような反人種差別的なメッセージの曲もありますが、イスラーム教の宗教歌謡、カウワーリーを用いた曲もあります。彼は、単身パキスタンに行き、イスラームにおいて音楽家はどんな存在理由があるのだろうかと、自分のことを問いただすドキュメンタリー・フィルム『Pardes』も制作しています。

彼らは 90 年代の初頭のイギリスにおいて、インディーズ・レーベルを設立し、人種差別や社会メッセージを歌い、コミュニティー内部だけに終わらないメッセージを外に発信し始めました。日本で最大のフェスティバル、フジロックフェスティバルの大トリを務めるまで成長したエイジアン・アンダーグラウンドのバンド、エイジアン・ダブ・ファウンデーションを発掘したのも彼らです。

ただファンダメンタルは音楽的には当時のヒップホップと変わらないので、今聞いても余りおもしろくないかもしれないですね。

次はまたタイプ 1 に戻ります。イギリス在住の南アジア系の若者がパンジャービー語やヒンディー語で歌ったところで、コミュニティーの外側の人間は誰も興味を示さなかった。それに対してラヴィ・シャンカルは 1960 年代から海外の音楽ファンに届いていました。それは彼がシタールという楽器の奏者だったからです。声楽よりも器楽のほうがユニバーサルなのです。言葉はその言葉を話す人種やコミュニティーに属するものですから。次はエイジアン・アンダーグラウンドのタブラ奏者、タルヴィン・シン（Talvin Singh）です。タブラとは北インド古典音楽に使われる二台一組の太鼓です。

今からお見せするのはアイスランドの女性歌手ビョーク（Bjork）がイギリスのテレビに出演した際の演奏です。

《映像・音響資料：Bjork「Big Time Sensuality」1994 年》

これは 1994 年と 20 年近く前ですが、ビョークは今も最前線で活躍されていますね。普通のロックとは全然違う形のアンサンブルを彼女は常に求めていて、この時も伴奏はパイプオルガンとタブラだけですから。そこでタブラをたたいているのが、当時 24 歳のタルヴィン・シンです。

タルヴィン・シンは 1998 年にデビューアルバムを発表します。インドの古典音楽の高い音楽性を元に自分だけの音楽をつくるタイプ 1 のエイジアン・アンダーグラウンドです。

《映像・音響資料：Talvin Singh「Butterfly」1998 年》

これは 1998 年で、もう 15 年も前の作品ですが、今聞いてもやっぱり格好いいですよね。インド古典音楽の高い音楽性と当時流行していたドラムンベースという、つんのめるようなリズムが、物すごくうまくミックスした音楽になっていると思います。

タルヴィンの初のソロアルバム『OK』には UK のエイジアンだけでなく、インド本国の有名な古典の演奏家、アフリカ系イギリス人の詩人、そして日本から坂本龍一や沖縄のネーネーズらが参加して、お金と時間をたっぷりかけて作られています。そして、イギリスのレコード大賞に当たる

マーキュリー賞を受賞しています。

タルヴィンは今も活動していますが、1998 年と今では音楽業界が変わってしまった今では残念ながら、デビュー前の新人を日本に送り込み、坂本龍一やネーネーズとレコーディングさせるなんて莫大な予算をレコード会社は用意できません。それは 20 世紀の音楽のつくり方であって、21 世紀の作り方ではないんです。

そうやって贅沢に作り上げたタルヴィンの『OK』というアルバムはエイジアン・アンダーグラウンドの中の一つの理想型、一つの頂点のようなものだったと思います。

このアルバムを聞いてたくさんの彼と同じ世代、もっと若い世代の、イギリスとか　アメリカに暮らすインド人の音楽を志していた若者たちが影響を受けた。

アメリカのニューヨークで育ったインド系のタブラ奏者／ドラマーのカーシュ・カーレイも、『OK』を聞いて、自分の音楽をつくる道が初めて開いたと言っていました。

エイジアン・アンダーグラウンド――2000 年代：欧米からインド本国へ

次はインド亜大陸に行きます。エイジアン・アンダーグラウンドの定義として、欧米に住んでいるインド系の 2 世、3 世がつくっていた音楽という定義をしましたけれど、21 世紀になると、それがイギリスやアメリカからインド本国へと舞台を移します。インドの経済成長とシンクロしているのです。

1991 年、インドでは外貨が不足し、それまでの国内優遇政策をやめ、経済の自由化を進め、海外の会社を積極的に呼び込むようになります。そして、90 年代の後半になると、ショッピングモールに海外のブランドが普通に入ってくるようになりました。

そんな時代のインドを舞台にした 2001 年の映画、日本でも公開された『モンスーン・ウエディング』です。モンスーンの季節のデリーを舞台に、新たな中産階級の 2 人が見合い結婚するまでの話です。中産階級の新郎はアメリカに留学していて、庶民の結婚プランナーは携帯電話を持ち始めています。そういう時代です。結婚プランナーは出入りしている家の女中と恋に落ち、主人公の新婦は会社の上司と不倫していて、色々問題があるけど、最後にはモンスーンの雨の中で結婚式を挙げる。この映画はインド制作の映画ですが、そこで使われた音楽は明らかにタルヴィン・シンの『OK』に影響を受けたものでした。

《映像・音響資料：Midival Punditz「Aaja Re」2001 年》

僕はこの映画を南インドのチェンナイの映画館で観ました。そして、見終わってそのまま CD ショップに行き、サントラ盤を買いました。そしたら音楽を作っているのはミディヴァル・パンディッツ（Midival Punditz）というグループだったんです。ミディヴァルとは英語で言うと中世の意味ですね。そして、MIDI というのは楽器を演奏する方はわかるでしょうが、電子楽器の統一規格のことです。だから「中世」、そして「電子楽器時代」という 2 つの言葉をもじっている。そして、パンディッツというのは「バラモン階級の僧侶」のことです。だから「中世の僧侶」という意味と、「電子楽器の僧侶」という意味をかけているグループです。そんな名前から、何となく僧侶みたいな白いひげを生やしたおじさんたちがやってるのかなと最初は思ったのですが、僕は翌年、イ

ンドのデリーに行って彼らに会ったら、どこにでもいる若い上流階級の兄ちゃんだったんです。

その頃には、彼らは既にアメリカのレコード会社からアルバムを出して、ワールドワイドデビューしていました。デリーに住んでいても、インドでは全然知られていないのに、すでにワールドワイドデビューを果たしているんです。彼らに話を聞くと、アメリカに移住しろと言われるけれど、自分たちの音楽はやっぱりデリーで生まれた音楽だから、デリーで作ることに意義があるし、デリーから離れないと言っていました。彼らは今ではボリウッド音楽のリミキサーとしても非常に人気があります。

さて、今、話で出たとおり、エレクトロニック音楽は楽器が演奏出来なくても、才能と努力とセンスなどがあれば、すばらしい音楽を作れる可能性がある。でも、逆に言うと、誰でも同じ音を真似して作ることが出来る。なので、すごく格好いいと思ったエレクトロニック音楽でも、次の年にはダサいものに変わります。ロックやヒップホップなどよりもはるかに流行り廃りが早いんです。

ただ、UK エイジアン、エイジアン・アンダーグラウンドの音楽は電子楽器だけじゃ作れなかった。タブラをたたく必要があり、シタールを弾く必要があり、実際に古典楽器を演奏する必要があった。しかし、それさえ、90 年代の電子楽器の進歩によって変わってしまいました。上手い人の演奏をまるごとサンプリングして、使ってしまえばいいじゃないかと。そして、世界中のエレクトロニック音楽の中に、例えばラヴィ・シャンカルのシタールの演奏や、ザキール・フセインというタブラ奏者のタブラ演奏がそのままサンプリングして使われるようになりました。

そうしたサンプリングで作られた音楽に対して、アメリカ人のプロデューサーのビル・ラズウェルが、さきほどのタルヴィン・シンやインドを代表するナンバーワンのタブラ奏者ザキール・フセインを招いて、エレクトロニックの音楽家たちが全部サンプリングやコンピューターに演奏させている音楽を、全て人力で生演奏してしまおうというプロジェクト・バンド「タブラ・ビート・サイエンス（Tabla Beat Science）」が生まれました。

僕は彼らのライヴ盤 CD を聞いて、衝撃を受けて、インターネットで彼らの次のライブの予定を調べました。するとアメリカのカリフォルニアとレバノンのベイルートが予定されていたので、すぐにベイルート行きを決定しました。そして、ベイルートでザキール・フセインたちと初めて会って、取材をすることが出来ました。

《映像・音響資料：Tabla Beat Science「Sacred Channel」2002 年》

タブラ奏者のザキール・フセインという方は、その時点で十何年前の時点で世界のトップだし、その横にいたサーランギという弦楽器の奏者のスルタン・カーン。彼はつい先日、亡くなってしまいましたけれど。この二人はインドを代表する人間国宝級の演奏家です。イギリスやアメリカの南アジア系の若者たちがつくり始めた音楽が、いつの間にか、ここまでエスタブリッシュされた音楽になった。音楽的にはすばらしいけれど、これはもはやアンダーグラウンドではないですね。ここでエイジアン・アンダーグラウンドは音楽的には頂点に達してしまい、もうこれ以上のものは作れないという状態になります。

今度は逆にもっと地に足の付いたアンダーグラウンドなものに戻りたいと思います。次は先ほど話が出たバングラです。パンジャビ MC（Punjabi MC）のこの曲「Mundian to Bach Ke」は 2003 年にアメリカでも、日本でも新種のヒップホップだと思われて大ヒットしました。

《映像・音響資料：Punjabi MC「Mundian to Bach Ke」2003 年》

バングラはインド北部デリーの北にあるパンジャーブ州の農業の収穫祭の音楽です。「バング」とは大麻の意味です。焚き火に大麻をくべて、その周りをぐるぐる回りながら、踊り、収穫祭を祝った。そういう音楽が発祥です。

「チャンカチャンカ」と鳴るトゥンビという一弦の楽器と「ドンガドンガ」と鳴る両面の大太鼓のドールが伴奏し、そこに即興的に詩を乗せていったものが最初のバングラでした。それが 1980 年代以降に、イギリスに移住したパンジャーブ系の若者たちによって、ヒップホップやレゲエが取り入れられたんです。これはタイプ 3：コミュニティーの中だけの音楽、パンジャービー語がわかる人たち、もしくはバングラを聞くと踊りたくなる南アジア系の人たちに向けた音楽です。にもかかわらず、偶然というか、何かの間違いがあったというか、アメリカやイギリスや世界中、日本でもヒットしてしまったんです。

この曲に続く 2 曲目の世界ヒットが生まれなかったので、バングラは一時の流行だったと思われていますが、そんなことはなく、イギリスに暮らすパンジャービー系のコミュニティーの中では今も愛され続けています。2005 年には日本の安室奈美恵までバングラ風の「WANT ME, WANT ME」というシングルをリリースしました。

バングラはイギリスで主に作られています。イギリスはビートルズの時代から世界のポップ・ミュージックの中心地なので、バングラもそうしたイギリスの流行り廃りに常に影響を受けて、どんどん進化しています。

このバングラを研究されていたのが前回に登壇された栗田知宏さんです。

彼はタイプ 3 のバングラだけでなく、タイプ 4、インド音楽の要素を使わず、欧米音楽の土俵で勝負しているジェイ・ショーン（Jay Sean）という R&B 歌手も研究されています。ジェイ・ショーンは今や世界で一番有名な南アジア系、インド系のアーティストです。しかし、音は完全に英米の R&B、黒人音楽です。

《映像・音響資料：Jay Sean「Down」2008 年》

この曲はアメリカでナンバーワンになりました。日本でも FM などでかなり流れました。歌っているのがインド系とは知らない人も多いと思います。ジェイ・ショーン、本名はカマルジット・シン・ジューティというパンジャーブ系の名前です。イギリス出身で、もともとはバングラの曲も歌っていたのですが、あるときアメリカに行って、R&B のプロデューサーとともに作品をつくったら、それが大ヒットしちゃったんです。

そして、欧米の音楽シーンにおいてセレブになってしまいました。全然インドらしくない音ですが、これもエイジアン・アンダーグラウンドの一例です。

もう 1 人、紹介したいのはスリランカの出身で、イギリスで育った女性ラッパー M. I. A. です。彼女も音楽的にはインド音楽の要素がほとんどありません。M. I. A. とは「Missing In Action」、軍隊の言葉で「作戦中に行方不明」、「推定死亡」という意味の略語です。彼女の父親はスリランカの分離独立武装ゲリラ組織「タミルの虎」の幹部なんです。

父親が行方不明になり、彼女は少女時代にお母さんに連れられ、イギリスに逃げた。そこで彼女は音楽を習ったことはなかったけれど、ラップをしたり、電子楽器で音をつくることはできた。彼

女は非常にアーティスティックに非常に審美眼のある方で、プロモーションビデオやグラフィックデザインまで含めて世界の最先端と目されるようになった。彼女の音楽は常に難民の立場から物を見ています。彼女は欧米のレコード会社の重役の息子と結婚して、今では完全なセレブになっています。それでも彼女は難民や社会的弱者の視点から音楽を作っています。

一番新しいシングル、「Bad Girls」のミュージックビデオは、日本では全く知られていない湾岸諸国やアラブのユースカルチャー、現地版の暴走族、ドリフト族を取り上げています。

《映像・音響資料：M. I. A.「Bad Girls」2012 年》

車を斜めにして片車輪だけで走るなんて、湾岸ドリフト族というのが日本にもありましたけど、こちらはリアル湾岸ですよね、こういう湾岸諸国のユースカルチャーは日本には絶対に伝わってこないけど、実際にあるわけで。日本では例えば、群馬県や愛知県の自動車工場で働く在日ブラジル人のユースカルチャーとか。誰も知らないけれど、実はそういうところから何か新しいアートが生まれてるのかもしれない。

ただ、彼女の音楽はインド音楽と全く関係ない音楽です。それでも、彼女は余りにも突出してるので、ボリウッド、インドの映画音楽の一番の作曲家 A. R. ラフマーンが映画『スラムドッグ＄ミリオネア』の主題歌に彼女を起用したりもしています。21 世紀に入ってから、インドはとにかく外にいる人たちを国の中にお金を使ってでも取り込もうとする動きが目立ちます。

もう 1 つ、最初にちょっとお話ししましたエイジアン・ダブ・ファウンデーション（Asian Dub Foundation）というグループがあります。日本でも人気があり、なんとフジロックで大トリを務めるような存在です。

もともとはロンドンに住む南アジア系の子供たちを麻薬や犯罪から救い上げるための NGO から発展したんです。彼らはインド音楽というよりはパンク・ロック的な音楽性なんですが、それでもタブラが使われてたりとか、メロディーにもインド的な要素がある。世界で一番有名なアジア系ロックバンドで、すでに 20 年以上活動しているにもかかわらず、常に敗者、弱者、移民の立場から物を言ってます。「A History Of Now」というビデオをちょっと見てもらおうと思います。

《映像・音響資料：Asian Dub Foundation「A History Of Now」2010 年》

この曲は 2010 年の暮れぐらいにリリースされ、曲名は「A History Of Now」「今の歴史」です。「太陽はダウンロードできない、海もダウンロードできない、そして、おまえもダウンロードできない」という歌詞がいいですね。「ストトト、ストトト」というリズムはチュニジアやモロッコのリズムなんです。イギリスに住んでいる南アジア系のミュージシャンたちがそれをサンプリングして、ロックを作った。僕は 2010 年の終わりに北アフリカのリズムを使って、おまえはダウンロードできない、今の歴史はダウンロードできないと歌ってる曲を聞いた。その後、2011 年の 1 月にモロッコとエジプトに行って、エジプトではエジプト革命の真っ只中に遭遇したんです。

ロック、時代をつくるロックには時々、予言的な曲があるんですよ。でも、そういう予言をしたミュージシャンは大抵早死にしてしまうんですけれど。ドアーズのジム・モリスンとか。この曲も発表された直後に北アフリカからそういう動きが出た。半年後にエイジアン・ダブ・ファウンデーションのメンバーに会った時に、その事を話すと、いや、俺たちはそんな予言はしたつもりないんだけど、ロックには時々そういう曲ってあるよねという話になりました。親しみやすいインド的、

アジア的なメロディーのおかげで日本でも人気が出たグループです。これはタイプ 2 であり、同時に 4 です。社会的なメッセージを歌い、音楽性は欧米のパンク・ロックです。

エイジアン・アンダーグラウンド――2000 年代：音楽番組とともに

今度はインド、パキスタン、インド亜大陸に行きます。音楽業界が衰退することによって、欧米や日本ではレコードや CD の販売だけではミュージシャンが食えない時代になりました。しかし、21 世紀以降、経済成長を果たしたインドでは逆に、海外で成功したミュージシャンたちを幾らでもお金出して呼べるようになった。欧米で輝いていた真面目なミュージシャンたちが今ではインドに舞台を移しています。

パキスタンで 2008 年に「コークスタジオ（Coke Studio）」という、コカ・コーラが提供する音楽番組が始まりました。パキスタンはインドと兄弟のような国ですけれど、21 世紀のアメリカによるアフガニスタン政策のあおりを受け、難民やターリバーン、アル・カーイダも流入し、社会が安定しません。インドと比べると、経済的には格差が生まれてしまってます。そして音楽家たちの多くは、音楽を演奏する場所もありません。ただ、アメリカのバークリー音楽大学を出ているような優秀な音楽家はたくさんいるんです。そういう人達が働ける場所がない。なので、インドに行ってボリウッド映画音楽界に参入している人もいます。あとは欧米に移住するしかない。そういうような状態でしたが、2008 年に「コークスタジオ」という音楽番組が始まります。この番組では、そういう鬱々としていた才能のある若いミュージシャンたちを民謡や宗教音楽の楽師たちと共演させるんです。しかも、シンド、バローチなどの少数民族の楽師たちをスタジオに連れてきて、アメリカ帰りのぼんぼんの音楽家たちと一緒に音楽を作りあげていき、生演奏させる。今まで自分の音楽を発表する場所がなかった人たちが、非常にいい働きをしました。この番組はすぐに人気となり、今に至るまで 5 シーズン続いています。それがパキスタンからインドにフィードバックするんですけど、その番組をちょっと見てもらおう。エイジアン・アンダーグラウンドのタイプ 1 ですね。

《映像・音響資料：音楽番組「Coke Studio」制作年不詳》

この音楽はカウワーリーという宗教歌謡ですね。パキスタンの地方の楽師たちが今の若い音楽家たちと一緒に演奏するという、今までにない機会が出来た。それに加えて、ポップ音楽を指向するインド人のミュージシャンにとっては、ボリウッドという映画音楽の世界で、12 億人に向けた大ヒット曲を作るしか成功の道はなかった。それに対してこの人たちはヒットするしないなんて関係なく音楽を作っている。

インド本国では、12 億人に向けて作られたボリウッドのヒット曲が全てに見えていたのに対し、隣のパキスタンから突然、イギリスやアメリカ生まれの音楽と同じようなアーティスティックな音楽が入ってきた。そこでインド人たちも、自分たちもこれをやらないとダメだと気づいて、即座に「コークスタジオ・インディア（Coke Studio India）」という番組を始めました。しかし、既に売れている名の通っているミュージシャンばかりを集めたので、第 1 シーズンは馴れ合いのような音楽性に終わってしまって、余り評判はよくないですね。パキスタンは若いミュージシャンたちが活動

の場を本気で求めていた。それに対して、インドには活動の場はいくらでもありますからね。ハングリー精神でしょうかね？

似た動きで、インドのテレビでも、あるお酒のメーカーが、「デワリスツ（The Dewarists）」という音楽ドキュメンタリーを 2 年前に始めました。どういう音楽ドキュメンタリーかというと、UK エイジアンやエイジアン・アンダーグラウンドの有名なミュージシャンを 1 組、もしくは欧米の音楽家を 1 組と、インド各地の地元で活躍する本当にリアルなエイジアン・アンダーグラウンドの人たち、例えばインパール、インパールはミャンマーの近くの町です。アジア系の人達が暮らしていて、インド人とは顔つきも宗教も違う。そんなインパールの反骨のフォーク歌手が出てきたり。あとはケーララ州のヒンドゥー教の宗教家なんだけれど、カーストが低すぎて、地域の寺にも入れてもらえない。そこで自分で寺を建てましたという。そういうリアルなアンダーグラウンドな人たちと、世界レベルの人たちを一緒に演奏させるんです。しかも演奏するだけでなく、彼らに背景を語らせ、セッションの過程もドキュメンタリーにしていく。35 分ぐらいの番組なんですけど、それが今、第 2 シーズンのナンバー 10 ぐらいまでやってます。

ボリウッド映画音楽だけでないインドの音楽。しかもインパールやチャンディーガルやケーララなど地方都市ですね。そこに住んでいる音楽家を初めてフックアップする番組を 2 年前からインドのテレビ局が始めました。

その中でお見せしたいのは、先ほど紹介したタブラ・ビート・サイエンスでドラムをたたいていたカーシュ・カーレイがケーララ州で 20 年以上活躍するロックのギタリスト、さらに、お寺を自分で建ててしまった宗教家と 3 人でセッションしています。

《映像・音響資料：The Dewarists S01E09 – ‘Sacred Science’
（Karsh Kale + Baiju Dharmajan + Njeralathu Harigovindan）2011 年》

これも現地で放送されたその翌週には YouTube でも見られるようになります。今まで海外だけのものだったエイジアン・アンダーグラウンドが、今はインドに舞台を移して、しかもインドの地方都市のリアルなアンダーグラウンドに場所を移している。考えてみれば、イギリスを経由しなければ届かなかった、今までのほうがおかしかったと思います。

先ほどのエイジアン・ダブ・ファウンデーションも「デワリスツ」に出ていますし、ラヴィ・シャンカルの娘さんのアヌーシュカ・シャンカルが出ています。映像制作なんかも、もう日本のミュージックビデオを超えちゃってますね。

さて、最後にお見せしたいのは、タルヴィン・シンと同じ時代に出てきたニティン・ソーニー（Nitin Sawhney）という人がいます。

ニティン・ソーニーという人です。僕はこの人は世界的に最も過小評価されてる音楽家だと思います。国籍はイギリスですが、インド系です。インド古典音楽と、ジャズのピアノ、フラメンコギターを学んだ音楽家です。その上、すばらしいメロディーを書いています。それが「コークスタジオ・インディア」に出演して、彼の名曲「ナディア」を演奏しています。この曲はイギリス人の伝説的なロックギタリスト、ジェフ・ベックがカバーしたことでも知られています。

《映像・音響資料：Nitin Sawhney「Nadia」「Coke Studio India season 2」2012 年》

さて、エイジアン・アンダーグラウンドの 30 年の歴史をたっぷりの映像とともに見ていきまし

た。僕が 30 年前に日本で聞いたモンスーンのように、日本のレコード会社が新しいものを紹介してくれるという時代はおそらくもう来ないでしょう。しかし、YouTube の時代になって、誰でもインドの音楽を発表されたその日のうちに、インド人と同じように享受すること、受け取ることができる時代になりました。なので、誰でも好奇心と行動力さえあれば、ほんの少しの力で、どんな音楽でも聴ける、手に入る時代になりました。僕は来月もまたインドに行ってきます。そして、メジャーなヒット曲から、民謡から、こうしたエイジアン・アンダーグラウンドまで見ていきたいと思います。

僕が聞き始めた 80 年代、インドはまだ経済的に豊かではなく、若い音楽家が自分の音楽性を信じて音楽をつくるということはできなかった時代でした。

今の時代、インドでもパキスタンでも、若い音楽家たちが自分の国にいながら自分の音楽性を追求するということがやっとできるようになりました。だからこれからもエイジアン・アンダーグラウンドを定点観測し、追いかけていくつもりです。

僕の個人的な 30 年のお話に長い時間、おつき合いいただき、まことにありがとうございました。

○司会　サラームさん、ありがとうございました。

質疑応答

（以下、参加者から寄せられた質問を読んでご返答いただく）

○サラーム　質問ありがとうございます。1 問目から僕が今回の講座に盛り込めなかったことが質問ですよ。

○質問　ボリウッド映画音楽には NRI アーティスト、NRI ってノン・レジデンシャル・インディアン、在外インド人のアーティストの影響がありますか。

○サラーム　あります。非常に強いです。先ほどの M. I. A. も『スラムドッグ＄ミリオネア』で歌ってますし、エイジアン・ダブ・ファウンデーションがやっていたりもします。

インド映画音楽は 12 億人のために曲をつくらなきゃいけないのと同時に、あとやっぱり差別化を図らなきゃいけないんで、新しいものにはすぐ飛びつきます。なので、NRI のアーティストが逆にインドにもう移っちゃって、ボリウッド専属になっちゃう場合もあります。その中の 1 つの例として、94 年に日本ではやった「Boom Shack-A-Lak」という曲があって、アパッチ・インディアンという何かレゲエのインド系のおっさんがいたんですけど、その後、インドに行かれて一時期ボリウッドでぶいぶいいわせてたんですけど、今は最近どうなったかわかんないですけど、そういうふうなことがあります。

○質問　階層性と音楽の好みを話されていましたが、きょう紹介されたつくり手が中産階級以上だとすると、インドの下層階級には広まっていない音楽なのでしょうか、それともある時期から普及しているものなのでしょうか。

○サラーム　これもいい質問ですね。下層階級まで届く音楽というのは、今、言ったとおりボリウッドの音楽です、12 億人に届く音楽。だから、ボリウッドの中にこういう音楽が入ることによっ

て、音楽はどんどんそういう人たちにも、届き始めてるということです。

○質問　一番おもしろいエイジアン・アンダーグラウンドのアルバムを教えてください、今。

○サラーム　難しい。難しいです、何でしょうね。今の時代は本当にアルバム単位じゃなくなっちゃったんですよ、さっきも言ったとおり、レコード会社がお金なくなったんで、アルバムを通して云々というのは、もうこれからはないと思います。もとを正すとアルバムという考え方自体、1970 年代にレコード会社がつくったものじゃないですか、ピンクフロイドとか、あと一番最初は誰だ、ビートルズの「サージェント・ペパーズ・ロンリー・ハーツ・クラブ・バンド」、アルバムという考え方自体が実は 50 年たってないわけで、だから 50 年たたないうちになくなっちゃったということだと考えたほうがいいと思います。

一番おもしろいエイジアン・アンダーグラウンドのアルバムは紹介できないですけど、こういうふうに「コークスタジオ」だとか、「デワリスツ」とか、一人一人、非常に 1 曲単位かもしれないけど、おもしろいものがたくさん生まれています。それ、おもしろいものは僕のラジオ番組、NHK で今やってる「音楽遊覧飛行」、「エイジアンクルーズ」、僕のウエブサイトから聞けるようになってる。インターネットでも聞けますから、そこで必ずかけるようにしてますんで、曲単位で何かそこでチェックしてください。

○質問　タルヴィン・シンもニティン・ソーニーもインド古典音楽要素を、ドラムンベースをリズムとしてハイブリッドしたのでしょうか。

○サラーム　これ音楽詳しい方ですね。まさにそのとおりですね、やっぱり音楽というのは時代につきまとわれるものです、もうそれは人間も料理も全て、文化も全てそうだと思います。ただ、コミュニティー・ミュージックとジェネレーション・ミュージックという考え方があります。ポップ・ミュージックは往々にしてジェネレーションのものです。だからタルヴィン・シンは 1967 年で僕と同じ生まれなんで、97 年に 30 歳、30 歳でドラムンベースが入ったら、それはドラムンベース入れますよね。だから、それはもっと例えば今、20 歳の人だったらまた違うものを取り入れると思います。それは時代によってしまうものだと思います。時代に影響を受けないというアーティストというのはなかなかいないと思います。

○質問　社会問題を扱うタイプのミュージシャンについて、移民の子孫である南アジア系の方々が、彼らのルーツである地方の伝統音楽を取り入れるとき、それに何らかのアイデンティティーを保持する意識を持つということはありますか。

○サラーム　ちょっと質問が長くてよくわかんないけど、100％ 取り除くことは不可能だと思います。アメリカでナンバーワンになったジェイ・ショーンという人も、それも栗田さんの研究に書いてあったけれど、結局、インド性を捨ててアメリカのナンバーワンになったら、今度はインドでナンバーワン・セレブ、スーパーモデルになっちゃうという、インドのだからファッション業界が黙ってないわけです、そういう格好いい人。ということで、インド性を捨ててみたところ、先にあったのはインドだったということなんですよ。なんで、幾ら音楽性を捨てたところで、エイジアン・ダブ・ファウンデーションに去年インタビューしたときに言ってました。あなたたちの音楽には余りインド性はないじゃない、でもどうして日本でこんなに受け入れられると思う、日本で 15 年間もフジロックで、そんなに一番いいところにいるロックバンドなんてあんたらぐらいだよと言った

ら、すごく僕たちもそれはうれしいんだけど、多分、僕たちの音楽の中に日本人と同じアジア性があるんだよ、それは自分たちは意識してないけどみたいなことを言ってました。だから、自分たちが意識してないところにもアジア性があるということを彼らは言ってました。

○質問　最後のほうで UK エイジアンの欧米、ヨーロッパ、インド、パキスタンという、欧米からインド、パキスタンという流れについてお話がありましたが、マレーシア、東南アジアへという動きはありますか。

○サラーム　マレーシアはまた不思議なところなんですけど、さっきプロモーションビデオ、マレーシアで録音してたのがありましたよね。マレーシアは数年前に観光局が物すごくボリウッド映画を誘致したことがありました、マレーシアで撮ってくれと。そういうことをマレーシアに……って、マレーシアの名所を使ってくれ、そういうふうな動きはあるんですけど、マレー人はインドネシア人と比べても、これはすごく残酷なことを言うようですけど、音楽はじゃんけんみたいなもので、強い国と弱い国があるんです。音楽は非常に不平等なんです。例えばブラジルの音楽は聞くけど、パラグアイの音楽は誰も聞かないですよね、いい音楽あるのかもしれないけど。韓国の音楽は、韓国って北朝鮮入る。とにかくそういうふうに、音楽というのは物すごく実はヒエラルキーのある、強度のあるところとないところの差があるところです。それでマレーシアの音楽というのは、今の時代、強度は低いんです、残念ながら。どうしてかというと、マレー人は服買っちゃうからじゃないかなと僕は思うんですけど、行くたびに。音楽よりもそっちのほうが興味があるんだと思います。マレーシア or 東南アジアとなってます。東南アジアは僕の専門外なんで、東南アジアの専門の方に逆に話を聞きたいです、すみません、答えられないです。興味深い話をありがとうございました。

東南アジア、インドネシアの芸能が専門なのですが、さっきの方ですね、東南アジア、インドネシア、物すごく行ってみたいです。最近、久しく行ってないです。

○質問　現在の関西におけるクラブミュージックの場、オールナイト営業、ダンスの禁止について、どのような感想をお持ちですか。

○サラーム　本当悔しいですね。僕、毎年、関西に DJ で呼んでいただいてたんですけど、1 年半前から来てないです。だから、きょうは 1 年半ぶりに関西来たんですけれど、ばからしいですよね。本当それで中学校で、そういうこと、おやじっぽいことを言うのはやめます。

インド、パキスタンなどの国で、そういったクラブカルチャーへの規制はありますか。というか、騒音規制すらない国ばっかりじゃないですか。さっきも来るときに話したんですけど、この間、イスラエルに行ったんですよ。イスラエルって先進国のくせに、自動車を買うのに車庫証明が必要ないんですよね。先進国って、やっぱり車庫証明がない国ってよくないと思うんですけどもね、だから国民の数だけ車がふえても誰もケアしないということですよね。それ、どうでもいいんですけれど。だから、本当どうでもいいことがどの国にもあります。すみません。

○質問　私はジョージ・ハリスンファンなのですが、インド人はジョージがインド的なものをビートルズで取り入れたことを実際にどう思っているんでしょう。

○サラーム　もちろんインド人は自分たち、しかもイギリス人が自分たちの文化に、イギリス人って自分たちを支配してた人たちじゃないですか。やっぱりイギリスに対するコンプレックスって、

すごく強いんですよ。それで、いまだにスコッチが好きだし、それでクイーンズイングリッシュ、普通に使うし、あとイギリス人が使えないような難しい語彙も物すごく使います。なんじ、thou でしたっけ、なんじという言葉はよく英語で使いますね、彼らは。そんなのイギリス人、使えないですよ、もう。だからジョージ・ハリスンに関しては、非常に喜んでいるという面もあるけど、それ以上に弊害がついてきたんですよ、ヒッピーがいっぱいインドに来ちゃったじゃないですか。インドの治安とか、ゴアとか物凄く治安が悪くなっちゃって、青少年に悪い影響を与えて、そこからゴアトランスっておもしろい音楽が生まれてるのは間違いないんだけれど、あらゆることは二面性があると考えるとおもしろいと思います。

ただ、それでヨガとかそういうものが、自分たちはばかにしてた、インドのものだから、ニューヨークではやったから、今度は自分たちが取り入れて、セレブヨガとか、ホットヨガとか、そういうのはインドでまたはやってます。だから、やっぱり日本人と同じで海外を経由するといいものになっちゃうんですよね、すごくアジア人の弱いところだと思います。

これで終わりですか。何か偉そうなことばっかり言ってますけど、何かインドに毎年行っていて、ことしも運よく何か 3 月に 1 週間行くことになりました。それでまた音楽のこと、映画のことを取材してきます。それはラジオでも話しますし、あと『テレビブロス』という雑誌でもやるつもりなので、機会があったらぜひよろしくお願いします。

じゃああありがとうございました。

○司会　サラームさん、本当にきょうはめちゃめちゃおもしろい話をありがとうございました。阪神間ではなかなか聞けないエキゾチックな話題に満ちたお話でした。皆さん、もう一度、拍手をお願いします。

そして、皆さんにはきょう寒い中、ご来場くださいましたこと、厚くお礼を申し上げます。ありがとうございました。

【サラーム海上氏の主要著書及び出演番組】

『イスタンブルで朝食を　オリエントグルメ旅』双葉文庫、2016 年
『MEYHANE TABLE　家メイハネで中東料理パーティ』LD&K、近刊予定
『21 世紀中東音楽ジャーナル』アルテスパブリッシング、2012 年
『エキゾ音楽超特急　完全版』文化放送メディアブリッジ、2008 年
『PLANET INDIA インド・エキゾ音楽紀行』河合書房新社、2006 年
NHK FM「音楽遊覧飛行　エイジアンクルーズ」（ナビゲーター）

追記：本報告記録は、研究会当日の音声記録を文字化したデータを元に、発表者サラーム氏の校閲が加えられて作成された。なお全体の編集作業は南アジア／インド班員・福内千絵が担当した。